

令和7年司法試験 法科大学院別合格者数(上位15校)			
NO	大学	合格者数	合格率(%)
1	早稲田大学	150	46.15
2	京都大学	128	58.45
3	慶應義塾大学	118	50.00
4	東京大学	116	50.00
5	中央大学	77	40.53
6	一橋大学	61	47.66
7	神戸大学	56	41.18
8	東北大学	49	43.36
9	大阪大学	48	28.57
10	同志社大学	40	33.33
11	名古屋大学	32	28.57
12	北海道大学	26	35.14
12	九州大学	26	30.95
14	立命館大学	22	15.71
15	日本大学	21	20.19
15	明治大学	21	18.92

(司法研究科)

人文科学研究所 第111回公開講演会 「変わりゆく熱帯の自然 と住民たちの生業 —日本人が見たボルネオ のこれまでとこれから—」

人文科学研究所(人文研)は、10月25日(土)の午後に標記講演会を開催した。共催は、科学研究費助成事業・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))「西ボルネオの土地利用変化:空撮と聞き取りによる実態と要因のクロスボーダー比較分析」(22KK0012、研究代表者:林田秀樹)であった。この科研費プロジェクトは、今回の講演会の企画を担った人文研第22期部門研究会第7研究「東南アジアの小規模事業者に関する部門横断的研究:国・地域の経済社会に果たす役割をつかむ」内のサブプロジェクトとして活動しており、今回の講演会の趣旨は、そのインドネシア西カリマンタン州並びにマレーシア・サラワク州における調査研究活動の現時点での研究成果を一般・学生の皆さんに還元することであった。

講演会では、まず、祖田亮次氏(大阪公立大学大学院文学研究科・教授)が「グローバル化のなかのボルネオ—自然環境と生活様式はどう変化してきたか—」と題して基調講演し、引続いて、佐久間香子(東北学院大学地域総合学部・准教授)、上原健太郎(松本大学総合経営学部・専任講師)、渡辺一生(京都大学東南アジア地域研究研究所・連携准教授)の各氏が、調査地の両州への「ツバメの巣産業」の浸透、インドネシア西カリマンタン州における農業と金融、ドローン空撮による両州の土地利用比較を内容とする報告をそれぞれ行った。

祖田氏の講演では、数百年前から熱帯にあるボルネオ島の様々な森林産物が中国や欧州に輸出されることで、同島の住民たちが世界の市場と繋がっていた点で、食用作物生産がほとんどを占める温帯・日本の農業とは異なる特質をもってきたこと、近年はアブラヤシ栽培を小規模に行う小農たちが様々な国際標準の充足を要求されて自由な生業選択の困難に直面していることなどが指摘された。上原、渡辺、佐久間各氏からは、小規模ながら信用を供与されて経営を拡大していこうとする農家、地域によってかなり様相の異なる土地利用景観をみせる営農状況、高級中華料理の食材などに用いられるツバメの巣が中国経済の成長につれて需要を伸ばし、東南アジア一帯、特にボルネオ島でその巣の「養殖」を行う事業が発展してきていることが、現地でのフィールド調査で得られた情報を基に紹介された。

講演会の後半では、企画主体の人文研第7研究の代表者である林田秀樹をモデレーターとして、講演・報告に関連する様々なテーマをめぐって登壇者間で討論が行われた。聴衆からも様々な質問が寄せられ、当地の自然と住民たちの生業について認識を深める良い機会となった。参加者は登壇者を含め

て67名であった。

なお、講演会の記録は今年度内に『人文研ブックレット No.88』にまとめて刊行される予定である。詳しくは、ぜひそのブックレットをご参照いただきたい。



(人文科学研究所・教授 林田秀樹)

チュービンゲン大学で Doshisha Week 2025 を開催

10月29日(水)・30日(木)の2日間にわたり、Doshisha Week 2025をドイツ・チュービンゲン大学(以下、UTという。)の新大学講堂(Neue Aula)にて開催した。

Doshisha Weekは同志社大学とUT間で締結された戦略協定に基づき、毎年UTにおいて実施している研究・学生交流イベントであり、今回が第6回となる。今回のDoshisha Week 2025は昨年度から引き続き“Challenges for Next-Generation Researchers”をテーマに両大学の博士学生のチャレンジと研究の発展を目指す取り組みとなる。



本学からは同志社大学大学院博士後期課程次世代研究者挑戦的研究プロジェクト（JST-SPRING）から博士後期課程学生（社会学研究科、文化情報学研究科、生命医科学研究科、グローバル・スタディーズ研究科）6名が参加し、それぞれの研究内容を発表した。

開始にあたり、UTのカルラ・ポールマン学長より、あたたかい歓迎のご挨拶と、両大学の博士学生に激励の言葉をいただいた。小原克博学長はビデオメッセージでUTの多大な協力により、Doshisha Weekが開催できること、実質的な研究の連携が進みつつあることに感謝を述べられた。

初日の第1部は、生命医科学研究科の池川雅哉教授による質量分析イメージング技術から導くアルツハイマー病の病態仮説に関する研究の講演につづき、両大学から心筋症や腫瘍、脳科学へのアプローチ等、4名の博士学生の研究発表と議論が行われた。第2部はウクライナ出身の本学博士学生とUTの研究者による、ハクティビズム（Hacktivism）やサイバー行動が持つ政治的・倫理的側面についての議論が行われた。

2日目の第1部は、UTのメディア研究のズサンネ・マシヤル教授に映像における「色彩」の要素から映画作品を例にキネマトグラム（KinematoGramm）による興味深い分析について講演いただいた。両大学の博士学生はパーソナルカラー、アニメーションにおける色彩についての研究を発表し、異分野のアプローチからそれぞれの分析について議論した。第2部では社会科学分野より4名の博士学生がAI翻訳、民主主義の後退やポピュリズム、国家アイデンティティなど現代社会課題をとりあげた発表と議論を展開した。2日目の締めくくりとしてUTのカリン・モーザー・フォン・フィルセック博士による総括が行われ、亀山洋子 EU キャンパス支援室長による閉会の挨拶

で幕を閉じた。



両日で36名の参加があり、また Doshisha Week 終了後には両大学の教員から学生への助言や、関連するラボ訪問など、若手研究者同士の交流が活発に実施され、実り多い研究交流となった。

最後となるが、ご登壇くださった池川教授、開催にあたりご尽力いただいた関係者の皆様に、この場を借りて御礼申しあげる。



（研究開発推進機構 / EU キャンパス支援室）

2025年度ハリス理化学研究所 研究発表会「知のつながりが目指す未来」を開催

11月1日（土）に京田辺キャンパス恵道館において、2025年度ハリス理化学研究所 研究発表会が開催され、延べ約400名の参加があった。

研究発表会実行委員長 貞包浩一朗 生命医科学部准教授による開会挨拶の後、同志社社史資料センター社史資料調査員 小枝弘和氏による『トピックで振り返る同志社と京田辺ー明治時代から現在まで』と題した基調講演^{*}が行われた。



※基調講演は下記二次元バーコードから視聴できます。



続いて、同志社女子大学現代社会学部 塘利枝子教授、理工学部 北岸宏亮教授、同志社国際中学校・高等学校 佐藤友亮教諭、当研究所 榎太一助教、同鈴木祐太助教によって行われたトークセッションでは「京田辺での研究ライフ」をテーマにした、活発な議論が展開された後、当研究所所長 出口博之 理工学部教授による総括が行われた。



続いて複数の会場に分かれ、文化情報学部、理工学部、生命医科学部、スポーツ健康科学部、心理学部、グローバル・コミュニケーション学部、当研究所所属教員による助成金成果発表、ポスター展示による部門研究の研究紹介、創造科学教育夏期研修報告会等のプログラムが展開された。

同志社創立150周年、京田辺市との包括協定締結20周年、理工学研究所からハリス理化学研究所への名称変更10周年となる記念すべき年に開催された研究発表会は、最先端の研究成果を発表する場のみならず、同志社と京田辺の過去、現在そして未来について